

平成22年の高水温による ホタテガイ大量へい死からの復興状況について

平成22年夏の記録的な猛暑により、陸奥湾の水温は水深15m層で26.8℃の最高水温を記録し、25℃を上回った日が30日を超えるなど、観測史上最大の高水温により衰弱したホタテガイに潮流等のストレスが加わり、陸奥湾ホタテの大量へい死につながりました。

特に、水温の高い津軽暖流が流れ込んだことで、表層から底層まで全ての層が高水温となり、最も水温の影響を受けにくい地まき貝までもが被害に遭いました。

その後の調査では、21年産成貝及び22年産稚貝の約7割がへい死したものと判明しましたが、成貝、地まき貝のへい死は、親貝の不足という大きな問題となり、今後数年に亘る緊急的な親貝確保対策が求められました。

この問題に対し、県漁連及びむつ湾漁業振興会は、当初、成貝2,000トンの販売抑制を決定し、これに伴う損失を補てんするため、県、関係市町村からの支援と業界の拠出金を合わせ2億円のほたてがい母貝確保緊急対策事業を実施しましたが、その後、5,000トンの親貝の確保が可能との判断により、3,000トンの追加抑制分として国・県に支援を要請した結果、3億円のほたてがい再生産緊急対策事業を実施するに至りました。

この対策により、23年春の採苗に必要な親貝数は、最終的に6,000トンが確保され、同時に、(財)むつ小川原地域・産業振興財団の支援を受けながら、陸奥湾の公海に採苗区域緊急拡大事業を展開し、最大限の採苗器を投入したことと、地域間の稚貝融通の効果も加わり、陸奥湾全体では必要最低限の稚貝を確保することが出来ました。

このへい死被害により漁業者の生活は困



洋上作業

あおもり漁連

窮し、苦勞して育てた成員が再び高水温によりへい死するのではとの危惧から、成員づくりを行う漁業者が激減しました。

このままでは陸奥湾ほたての自力再生が困難になるとの危機感から、県漁連、むつ湾漁業振興会、青森県ほたて流通振興協会が県に支援を要請し、業界の拠出金と合わせて1億円のほたてがい成員づくり緊急対策基金を創設し、現在、成員づくり推進のための事業を実施しているところであります。

24年春の採苗については、この事業と2年連続となる公海採苗区域緊急拡大事業及び23年度のほたてがい再生産緊急対策事業で実施した親貝移設の効果が現れ、必要十分な稚貝が確保される見込みとなっています。

また、23年産稚貝も順調に育ち、24年の半成員として出荷され、8月には45,000トンの計画を達成致しました。

このことから、平成22年夏の高水温によるホタテガイの大量へい死からの復興は順調に進んでいるものと考えられます。

陸奥湾のほたて漁業再生にご協力頂いた、国、県、関係市町村、並びに(財)むつ小川原地域・産業振興財団や水産関係団体の皆様、また、稚貝の融通にご協力頂きました漁協、漁業者の皆様には厚く御礼申し上げます。

今後は、ほたてがい成員づくり緊急対策事業の中で設置した陸奥湾ほたてがい成員づくり推進協議会の取組により、安定的な成員づくりを推進することにより、陸奥湾のほたて漁業を再建できるものと確信致しております。



出荷風景